

Aranzadi, Javier: *Liberalism against Liberalism: Theoretical analysis of the Works of Ludwig von Mises and Gary Becker*

London: Routledge, 2006, xvi + 215 pp.

As the title indicates, the first task of this book is to analyse different kinds of Liberalistic thought in economics, in particular, the Austrian school represented by L. v. Mises, and the Chicago school represented by Gary Becker. These schools are often regarded as much the same, since both of them defend market liberalism based on methodological individualism. The aim of the author of this volume is, however, to draw attention to crucial differences between their theories. The second task of the book is to explore by means of this analysis what “the scope of economics” is. According to the author, after the demonstration of the failure of communism, not only the power of liberalism but also the power of economics has substantially increased, to the extent of their invading other spheres of social science, what the author calls “economic imperialism.” The author puts the problem in this way: “does the overcoming of socialism imply reducing man to the neo-classical *homo economicus*?” (Preface and Acknowledgements, p. xv)

In the process of discussing these problems, the author focuses on analyses of the difference concepts of “human behaviour” of Mises and Becker. Becker’s concept of human behaviour is described as that of an artificial and mechanical *homo economicus*, while Mises’s definition of human behaviour is described as more ‘realistic’ and more gen-

eral, that is, it regards humans as composed of “flesh and blood.” (p. 8)

According to the author, Becker’s concept of human behaviour is problematic since it lacks any relation with ‘real’ human existence, that is, with subjective aspects of human behaviour. Becker introduced the concept as an extended version of neo-classical *homo economicus* and formulated it in order to conform with statistics; thus his concept of human behaviour presupposes the maximisation of utility, market equilibrium, and stable preferences. In this sense, humans are passive agents that act to maximize their utility according to their ‘given’ conditions. “He does not consider the verification of the hypothesis with the real object of study important.” (p. 126) The author points out that Becker’s concept is inapplicable when one tries to explain phenomena, such as market dynamism, which occur outside stable institutional conditions and are triggered as the result of an interplay of the creative capacities of human behaviour.

After criticising Becker, the author emphasizes that Mises’s concept of human behaviour has much greater explanatory power, since Mises defines human action in a more realistic way, that is, as a process of developing means to achieve ends. For example, Kirzner introduced a theory of market dynamism based on Mises’s concept of human

action, which includes the human capacity for creativity and discovery; that is, entrepreneurship. The author claims that Mises's concept of human behaviour solves the 'problem of knowledge B,' that is how one can explain institutions that are uncertain and changing.

From these considerations, the author concludes that Mises's concept of human behaviour serves as a suitable basis not only for economics but also for the other areas of social science, while Becker's concept deals only with the business or economic aspect of human life, and is kept in conformity with static facts only by 'ad hoc' or 'as-if' assumptions. Since human behaviour in Mises's sense provides social phenomena with 'causal explanations,' that is, it asserts that all social phenomena are triggered by human action, "This universality [of human action] enables us to study the relations that exist between society, culture and the individual." (p. 181)

The author's emphasis on different kinds of methodological individualism may be the definitive point by which the Austrian school can be distinguished from the Chicago school. And the author is also quite right to criticise Becker of going too far when he tries to explain all social phenomena, such as marriage, by means of the concept of *homo economicus*, that is, of maximising behaviour

presupposing stability. Thus the author clearly achieves the first aim of this book.

However, with respect to his second aim, that is, to reveal the scope of economics, I doubt whether the author gives a fully satisfactory discussion. He tries to justify Mises's concept of human action as the main causal factor to be found throughout the social sciences, on the grounds that it accords with "reality." To investigate "reality" in social science in terms of human rational behaviour, in accord with the rationality principle of methodological individualism, seems to me rather unfruitful. This principle involves abstraction and clearly can be falsified by observations of "real" irrational behavior of humans acting without any purpose. The introduction of the rationality principle has methodological advantages in the social sciences, since with its use one can avoid arbitrariness of explanation and render theories more objective. This advantage does not come from any "reality" of human behaviour, but rather from a methodological decision to keep social science more objective. The most important problem is that of introducing methodological individualism properly into the social sciences, not the empirical scrutiny of the concept of rational behaviour.

(Natsuka Tokumaru: Kyoto University)

Adam, Ulrich: *The Political Economy of J. H. G. Justi*

Bern: Peter Lang, 2006, 317 pp.

カメラリストの代表者の1人 J. H. G. v. ユスティに関する研究が続けて英語で発表された。1つはケンブリッジ大学の Ulrich Adam の本書。もう1つはタリン工科大学の Erik S. Reinert 著 'Johann Heinrich Gottlob von Justi (1717-1771): The Life and Times of an Economist Adventurer' と 'A Bibliography of J. H. G. von Justi' (with H. Reinert) である (後者は, Backhaus, J. (ed.), *Johann Heinrich Gottlob von Justi: The Beginning of Political Economy, series The European Heritage in Economics and the Social Sciences*, 2009 に収録予定。後者2論稿の閲覧は <http://www.othercanon.org/papers/> で可能)。これらは共に、ユスティの生涯と著作とを厳密に再現して、経済思想史におけるユスティの意義を改めて問い直す内容になっている。

ユスティは、猛烈な多筆ぶりとその胡散臭さが漂う経歴とが災いしてこれまで十分に研究されてこなかった。Adam は、『J. H. G. ユスティの政治経済学』の序論において、本書の目的は、「ユスティの生涯、著作について綿密な調査を初めて行い、そして、彼が自分の考えを展開していった知的・歴史的環境を提示することである。ユスティは、…相当に立派な政治経済学者であって、彼の考え方は、18世紀の脈絡の中で十分な意味があったということを論証していく。本書はユスティ自身に新しい光を照らすものであり、しかも、18世紀中葉ドイツにおける知的功績の役割をヨーロッパにおける政治経済学全体の形成の中で再評価することを意図するものである (p. 13)」と述べている。Ernest Lluch の官房学研究と同様、ユスティ著作物のドイツ語から他国語への翻訳を通じたヨーロッ

パ各国への流布とその影響経路に着目すると同時に、他国 (とくにフランス) の政治・経済思想がユスティへ波及・流入する逆の経路を探究する双方向の複眼的視座を提示したことが Adam の新機軸となっている。

ユスティ自身の出発点は、ウィーンのテレジアヌムへの教授就任講義「学問の繁栄状態と、国家を強力・幸福にする手段との密接な関係」(1750年)である。この講義における2つの重要な洞察——市場を基盤とする競争の世界で一国が生き残るには商業政策が決定的重要性を持つこと、そしてその成功実現のために経済理論は政治改革を要求すること——は、彼の『国家経済学』*Staatswirtschaft* (1755年)の特質となって登場する。'Staatswirtschaft' は本来 'State economy' を表すが、Adamによればそれは、'political economy' あるいは 'économie politique' に相当しており、従前の解釈が想定していたような、国家による経済事象への積極的統制機能を特別に重視する経済学の、とりわけドイツ的な形態を意味してはいないという (p. 49, n. 64)。ユスティは、これまでの官房学解釈の枠に収まらない多様性、新規性を持った人間として描かれることになる。だからこそ表題も「国家経済学」ではなく、『J. H. G. ユスティの政治経済学』とされたのである。本書は

第1章 序論

第2章 ユスティの生涯と著作

第3章 1750年代のヨーロッパの権力闘争

第4章 近代的君主制

第5章 政治改革

第6章 経済政策 (ポリツァイ)

第7章 結論

- 表1 ユスティ著作物の体系別概要
 表2 ユスティ著作物年表
 表3 同一の記述が見られるユスティ著作物
 表4 原典引用文のリスト
 文献一覧
 索引〔残念ながら人名のみ〕

という構成になっている。彼の猛烈な多筆ぶりは第2章、表1, 2, 3で紹介される。Adamによって提示されているユスティの著作数は、それを全67点とするReinertと完全に一致しているわけではない。ユスティの精確な文献目録の作成が待たれてならない。表1では、ユスティの著作が大きく3領域（文学作品・ジャーナリズム、政治経済学、自然科学）に大別され、政治経済学はさらに、政治学、経済政策（ポリツァイ学）、財政学（官房学）、交易論（商業学）の4分野に区別されている。表3は、独立の著述として公刊後、ユスティがそれを後の著作物の中に再録・再現した記述を一覧化したもので興味深い。

ユスティが執筆した時期は、オーストリア継承戦争から七年戦争までの期間に重なっている。これは、ドイツ諸国家がイギリス、フランス、オランダなどと伍していけるようになるにはどうしたらよいか、という問題をユスティに抱かせることになる。それへの答として彼は、商業社会への移行を実現する政治改革が不可欠であるとの認識を提示する。

ユスティの目指す政治改革、理想とする統治形態は何だったのであろうか。これまでの解釈ではユスティは、君主権は無制限とする絶対主義の擁護者、逆に統治に人民の参加を求める民主主義思想家と二様に解釈が分かれる。この2つの解釈にAdamは共に反駁する。ユスティが最終的に選択したのは民主政体でも貴族政体でもなく、君主政体である。ユスティは個人の自由を尊重したが、ドイツ諸国家の改革を推進しかつ上述のライヴァルに追いつくためには中央集権化された上からの改革が必要と考えたのである。彼は、専断的な君主権行使を制限する制

度的な安全装置として、等族議会に代わる有能な顧問官会議の活用を提案する。それは、サン・ピエールやモンテスキューとは完全に距離を置くものとなっている。

この君主制モデルにユスティの経済政策は大きく依拠することになる。ユスティは、国家の義務は、安定した、そして競争的な経済を創造することと考える。統治の究極目標はやはり、自由市場の創設となる。そこでは、独占、都市ギルド、節儉令、保護関税の撤廃が主張される。ユスティによれば、国家の役割は、経済問題を実際に指導するものから、経済問題が自己管理されるような適当な法的・政治的枠組みを単に提供するものへと縮小される。しかしながら、当時の経済状態は未成熟であり、当面は国家の支援・介入が必要である。商・工業に十分な発展が達成された後、政府は、自由交易という理想に経済を近づけるために介入を終了すべきというのがユスティの考えである。彼は、国家不介入ではなく、必要最小限の国家介入を主張した。こうした経済政策は、ポリツァイの対象に他ならない。これらは第6章において、租税政策も含めて詳細に分析される。

ヨーゼフ2世の諸改革やシュタイン＝ハルデンベルク諸改革の原型であり、近代商業社会への深い洞察を行ったのがユスティだとAdamは結論づけ、彼を高く評価する。本書は、新しいユスティ像を提供する労作である。しかしその一方で、官房学の解釈といった個別の論点が言及されないままとなっている。また、ユスティはそもそも『国家経済学』を官房学講義用教科書として執筆したはずだが、それが「政治経済学」に相当するというAdamの解釈に評者は即座には首肯しがたい。本書によって、ユスティそして官房学研究がより活発化することを期待したい。最後に、ユスティ家を表記する‘von’が表題から省かれているのはなぜであろうか。

（川又 祐：日本大学）

**Besomi, Daniele: *The Collected Interwar Papers
and Correspondence of Roy Harrod***

Cheltenham, U.K., and Northampton, MA, U.S.: Edward Elgar, 2003,
3 vols., lxxxv + 1557 pp.

経済学者でハロッドの名を知らぬ者はいない。しかし、彼の全体像を捉える研究はきわめて少ない。その理由は、ハロッドを知るための一次資料に制約があったからである。今回、ハロッド研究の第一人者であるベゾミ氏の多大な労により、戦間期（1919-1939年）の書簡・未公開論文・学術誌以外への投稿記事がまとめられた。ベゾミ氏は、世界中にバラバラになった数々の資料を集め、登場する文献の詳細や、展開される話題の背景を細かく調べて注を付してくれた。この申し分のない一次資料によって、われわれはハロッドの思考を生き生きと追体験できる。

まず、注目すべきは、ハロッドの経済学者としての出発点である (lx-lxi)。若き日に J. S. ミルに魅了されたハロッドは、ロックやヒュームから流れるイギリス思想に関心があり、哲学の専門家か (L8, L77: 書簡は L, 未公開論文は E, 一般的な出版物に掲載された記事は P で表す。連続する書簡は、最初あるいは最も重要な一点を提示する)、あるいは思想を実践に活かす代議士を志していた (L25)。ところが、ハロッドは、若くして父を亡くし、財産もなく、一人残された母を支えなければならなかった。大学卒業後、すぐに稼ぐため、仕方なく経済学の講師になったのである (L105)。彼の関心は、狭い経済の領域に限定されることがなかった。経済学の研究を進めつつ、その中に壮大な社会の構想を見出そうとした。社会の基礎的な構造に迫り、その認識を通じて重要な指針を引き出した古典派経済学が、ハロッドの手本であった

(E1, L45, L91)。

経済学者として仕事を始めた 1923 年から、業績を出し始める 1920 年代後半までの書簡と未公開論文は、ハロッドが経済学の中で何を追求していたかをよく伝えている。ハロッドは、古典派経済学が経済の動態、とくに進歩・成長を分析の対象としていたことに注目した。古典派の本質は、分配論を通じて成長の条件を考察していることだ、というのがハロッドの理解である。そこには何が経済の動態を支配しているかという問題意識がある。この問題意識が現代において失われてしまったとハロッドは考えていた (E1, E2)。

古典派の特徴を動態性に求めるのは、ハロッド独自の解釈である。彼は、古典派経済学の中にある一つの前提、すなわち経済が生産資源を最大限利用する傾向をもつという前提を、本質的ではないと考えている (E2, L91)。だが、ハロッドの理解とは逆に、生産資源の完全利用という考え方は、限界革命以後、生産要素市場に需給均衡が持ち込まれることによって、強化されてしまった。生産資源が完全に利用されるとすれば、成長は生産資源の外生的な拡大に依存するものとなる。このアプローチをとれば、成長は静態的均衡論の自然な延長上に置かれることになる。この成長に関するアプローチを、ハロッドは誤りとみなした。

そもそも生産資源を完全に利用する傾向など、企業者が生産を決める資本主義経済においては存在しないのだ (E2, L91)。ロビンソン・クルーソーや独立生産者の経済ならば、生産量

は労働の限界不効用逓増によって規定されるが、資本主義経済はそうではない。経済学をほぼ独学で習得したハロッドは、この資本主義の特徴把握まで、すぐに到達した。彼は、そこから先の研究の方向性を次のように定めた。第一に、現在の活動水準——完全雇用水準以下——を決める理論を構築すること、第二に、与件の外生的変化以外において動態を引き起こす原因を見出すことである。この研究は、新しい競争理論、物価変動理論、分配論、投資決定論などの様々な方向からアプローチされた。静態的均衡論とは違う基礎から現代の動態論を作り上げるといふ目標ははっきりしていた。だが、それを具体的な理論に仕上げるには、かなり時間がかかった。

1928年、ハロッドは、活動水準を決める理論のミクロ的な基礎として、不完全競争論の先駆的論文(E6)——異なった費用関数を持つ多数者のクルノー均衡が描かれている——を書いた。この論文がラムゼーによって否定されたことにより(L154)、ハロッドは神経症に陥ってしまう(L157)。オックスフォード大学で哲学の指導教官ジョセフと衝突したとき(L29)以来の、二度目の神経症であった。彼は心理カウンセリングを受け、1年後にラムゼーが誤解だったと認めたこと(L168)をきっかけに、ようやく回復に向かった。1920年代は、新しい体系を自らの力で構築しようと意気込みながら、なかなか形にならない苦難の時期であった。

1930年代、ハロッドは、不完全競争論に力を入れた。そこには二つの意図があった。第一は、競争理論を拡張することによって、ある時点における産出量の決定を、企業の直面した費用と需要の状況に結びつけること。第二は、その競争の中に不均衡の構造を見出すことで、景気循環を引き起こす動因を発見すること。ハロッドは、収穫逓増によって、景気の拡大および縮小が累積的に進行するに違いないと考えていた(L299)。動態を引き起こす原因を外生的

要因の変化に求めないと決めていたハロッドは、この時期から、動因として不均衡の構造を発見することに力を入れていく。

不均衡を発見する試みは、不完全競争論だけでなく、貯蓄と投資の不均衡という線からも行われた。ハロッドは、貯蓄と投資の不均衡という景気変動へのアプローチにおいて、ケインズの『貨幣論』を高く評価していた。逆に、ハイエクの『価格と生産』に対するハロッドの評価は低かった。信用創造による過剰投資の発生というハイエクの論理を、ハロッドは「進歩する経済の信用拡大」(1934)の中で批判した。この批判は、ハイエクを支持するハバラーやダービンと、書簡および誌面上における議論を巻き起こした(P8, P9, L355)。その一方で、ハイエク理論を退けるケンブリッジの一員カーンとの間で、興味深い議論が展開される(L375)。この時期、ケインズの周辺では、『貨幣論』の貯蓄概念を捨てて、『一般理論』の貯蓄概念——貯蓄は所得マイナス消費と定義され、この定義では貯蓄と投資は常に等しい——を採用しようとして決めていた。しかし、ハロッドは、ケインズやカーンが貯蓄概念を変更したことを知らなかった。そして、ケインズ=カーンの採用した貯蓄定義——ハロッドは「普通の定義」といふ——の意味は理解した上で、あえて経済の動因を解明するために、普通でない定義が必要なのだと考えた(L383)。カーンは新定義の革新性を丁寧にハロッドに伝授するけれども、ハロッドは動因となる貯蓄と投資の不均衡にこだわり、カーンの定義を受け付けなかった(L389)。

このハロッドの姿勢は、ケインズの『一般理論』に対する態度に影響してくる(L458)。普通の定義から導かれるケインズの乗数理論を、ハロッドは受け入れなかった(L471)。その理由は、次の通りである。動的なプロセスにおいて、貯蓄曲線も投資曲線も動いている。利子率も動いている。にもかかわらず、利子率は流

動性選好理論によって与えられ動かず、それによって決まる投資額も動かず、その投資額に貯蓄額が等しくなるように、所得が減少して均衡するという理論の組み立ては、あまりに静態的ではないか。こう考えたからこそ、『一般理論』草稿に対するコメントにおいて、ケインズの古典派利子論に対する批判——貯蓄と投資は恒等的に等しいから古典派の考えている貯蓄曲線には全く意味がないという批判——は行き過ぎである、とハロッドは述べたのである。

また、ハロッドは、動態理論を追求することによって、静態的なケインズよりもさらに上を行けると考えていた (L485)。そのため、静態的な乗数理論に対して冷淡であった。だが、この態度は、1935 年末ごろ、動態理論のパーツとして加速度原理を取り入れることによって、一気に変わった (E16, L511, L607)。加速度原理と乗数理論を組み合わせることで、不均衡の構造が浮かび上がる——加速した投資によって有効需要が増加し、資本不足が起きてさらに投資が加速され、上方への累積的過程が生じる、逆の場合は下方への累積がある——ということ、ハロッドは発見したのである。不均衡の構造さえ見出せれば、乗数理論を採用することに躊躇はない。利子論は、ケインズの提示した流動性選好だけでは静態的で不満だが、現在のところそれに代わる動態的な利子論は作れないので暫定的に受け入れることにする (L701)。このようにして、『景気循環論』(1936)で示されるハロッド動学は、形成されたのである。マクロ静学の基礎を作ったケインズ、そのケインズと古典派の動態性を接合しマクロ動学を作っ

たハロッド、というのがハロッド自身による位置づけである。彼は、最後まで、ケインズの上を行こうとする気概と自信を持っていた。

書簡や未公開論文を含めてハロッドの思考過程を辿ってみると、彼が常に動くものを捉えようとしていること、そしてそれを人間の主観的認識とは別の客観的構造から把握しようとしていることが看取される。このハロッドの動態把握の方法を知っておくことは、彼の全体像を理解する上で非常に役に立つ。

ここまでハロッド動学の形成過程を中心に紹介をしてきた (動学形成史は D. Besomi, *The Making of Harrod's Dynamics*, Macmillan, 1999 が詳しいが、本評における私の理解とは異なる点もある)。原著の魅力は、動学形成過程に留まらない。不完全競争論の展開 (L68, L149, L224, L227, L295, L311, L327)、不完全競争論から離れて経験主義=オックスフォード経済調査に流れるハロッドの思考プロセス (E15, E17, E18, L430, L445, L526)、イギリスの保護主義への転換やニューディール政策といった時事的問題に関する政治家との書簡 (L7, L137, L166, L240, L329, L491)、『国際経済学』の形成過程 (L76, L89, L91, L135, L229, L231, L269, L273)、分配論に関するピグー批判 (L146)、人口問題に関する提言 (P10, L684)、哲学をめぐるエイヤーとの議論 (L332) など、面白い点は尽きない。ハロッドの研究者のみならず、ケインズ、ロバートソン、カーン、ロビンソン、カルドア、ミードに関心のある研究者にも、それぞれに発見があるだろう。

(中村隆之：鹿児島国際大学)

Markwell, Donald: *John Maynard Keynes and International Relations: Economic Paths to War and Peace*

Oxford: Oxford University Press, 2006, xv + 320 pp.

本書は、J. M. ケインズの諸活動から国際関係論に関わる側面を抽出し、「戦争を回避し平和を促進する経済的要因は何か」に対するケインズの思想的変遷を考察したものである。筆者はメルボルン大学の政治学者で、国際関係論における理想主義 vs. 現実主義という対立図式において、一貫してケインズを「リベラルな理想主義」(liberal-idealist)の系譜に位置づけ、以下の4つの局面に分けて、その思想的展開を辿っている (pp. 3-4)。

① 第一次大戦前のケインズは、自由貿易こそが平和を促進するという「古典的な自由主義」(classical liberal)の知的環境の下で育った。重商主義あるいは経済的国家主義が戦争をもたらすという「経済的国际主義」の知的影響力は、第一次世界大戦後もケインズにとって少しも揺らぐことはなかった。「もしも保護主義がなしえないことがあるとすれば、それは失業を救済することである」という、後年ケインズ自身がしばしば引用する一節(『一般理論』p. 334等)は、この時期の立場をよく表している。当時のケインズにとって戦争を引き起こす経済的要因とは、「貧困、人口圧力、外国資本の進出、市場獲得競争」というリストであった (pp. 7-27)。

② 第一次大戦後のケインズは、「初期のリベラル制度論者」(early liberal institutionalist)と位置づけられる。国際関係論における理想主義は、ウッドロー・ウィルソンや彼の提唱による国際連盟の創設に代表されるように、国際法や国際機関を重視し、国際協調によって平和を構築しようとする学説であり、クレマンソーに代表される現実主義と対峙される (p. 109)。こ

こで重要なことは、戦争の経済的要因としての上記のリストに、「国際通貨システムの機能不全、貿易不均衡、失業」が加えられたことである (pp. 141-52)。戦前平価での金本位制復帰に反対し、デフレを回避する平価切り下げを主張したケインズは、金本位制の足枷から解放されるために、より弾力的な為替相場制度や金に依存しない国際流動性を提案した。

③ 1930年代初期のケインズは、「保護主義者」(protectionist)の局面とされる。その主張は、「国家的自給と国家間の経済的孤立のいっそうの進展は、平和を促進する要因として役立つだろうという信念に私は傾いている。経済的国际主義の時代は、戦争を避けるという点で、特に成功したとはいえない」(JMK, 21, p. 237)と言いつつ「国家的自給」(1933)において頂点に達する (pp. 152-63)。後述するように評者は、国際経済関係分野でのケインズ思想を理解する上で、この局面におけるケインズ解釈が一つの試金石となると考えているが、筆者はこの局面でも、それ以前および以後の局面と矛盾のない一貫性を見いだしている (pp. 163-65)。

④ 最後の局面である「成熟したリベラル制度論」(mature liberal institutionalist)は、「もし国内政策によって完全雇用を実現できるようになるならば…国際貿易は相互利益の条件のもとで喜んで行われる財およびサービスの自由な交換となるであろう」(JMK, 7, pp. 382-83)と述べた『一般理論』の完成を契機としている。英米経済協調 (pp. 261-65)を軸とした第二次世界大戦後の国際経済システムの構想においても、「巧く機能する国際通貨システムと完全雇

用を目標とする経済政策」が実現されれば、「再び自由貿易が戦争を除去し平和を促進する経済的要因となる」というリベラルな理想主義が貫徹されているという。

このように本書は、上記4つの局面の連続的な進化として、ケインズの思想的展開を纏めている。国際経済関係の分野に関する体系的なケインズ研究がないということ、この分野におけるケインズ研究には当時の歴史的コンテクストの理解が不可欠であることの2点において (pp. 1-2)、評者は筆者と問題意識を共有する。だからこそ、この分野に関するケインズに一貫したスタンスを見いだすことには、慎重にならざるを得ない。国際経済環境の激変という制約条件 (コンテクスト) の下で、プラグマティックに政策提言を変えていったケインズに、唯一変わらぬスタンスを見いだすとすれば、それは経済的国際主義とも経済的国家主義とも次元の違う、強烈な愛国心であったはずである (例えば、シュンペーター)。

「条件付きの自由貿易」(qualified free trade, pp. 163-65, pp. 265-66) の支持という点で、ケインズを一貫して「リベラルな理想主義者」ととらえる本書のキーワードの一つは、「国際協調」である。ここで、ケインズが自由貿易を支持する制度的条件とは、完全雇用を達成させる国内政策と、国際収支制約を緩和し資本移動を安定させる国際協調である。このような連続性の上に、先の「国家的自給」も位置づけられている。

詳細は拙著 (岩本武和『ケインズと世界経済』岩波書店、1999年、特に第6章) を参照され

たいが、評者は「国家的自給」を、ケインズ思想の重要な側面が鮮明な形で (あえて言えば歴史のコンテクストを離れた普遍的テキストとして) 語られているものと考えている。確かに一見この論文は、ケインズの保護主義への極端な傾斜と読むことができるが、むしろ金融面とりわけ資本規制の重要性を先駆的に提唱した論文でもある。国内金利を下げれば資本流出が起り、為替レートを維持するためには国内金利を上げざるを得ない、というメカニズムを遮断するような国際通貨システムを制度設計 (今日においてさえ難しい制度設計) する上で、今なお効果的な手段の一つは、資本規制である。このことを「国家的自給」論文は次のように述べている。「実際、私が心に抱いている望ましい社会の変化は、来るべき30年以内のうちに利率がゼロの点まで下落することを必要とするかもしれない。しかし、正常な金融的諸力の下で、リスク等を考慮した利率が、世界中で均等化するようなシステムの下では、このことは最も起りそうにないことである」(JMK, 21, p. 240)。しかし「(資本逃避) として知られている現象が取り除かれるならば、望ましい国内政策を達成することはもっと容易になる」ので、「何よりも第一に金融はナショナルなものにしよう」(ibid., p. 236) と述べたのである。

完全雇用が達成されている時に自由貿易が望ましいのは、ケインズにとっても自明なことであろう。しかし同じ原理は、自由な資本移動には当てはまらないとしたところに、ケインズの先見性があるのではないだろうか。

(岩本武和：京都大学)

Walker, Donald A.: *Walrasian Economics*

New York: Cambridge University Press, 2006, x + 357 pp.

著者はすでに、ワルラスの一般均衡分析を詳細に分析している (“Walras’s Market Models”, 1996). 序文に依れば、本書はその前著を補完すべく書かれたものであり、理論の「考え方」を明らかにすることで、前著の主張を補強しようとする。ワルラスの経済分析モデルの理論的背景にある “ideas” を示そうとする著作である。この二冊の著作が密接に関連している故に、併せ読むべきことを、著者は読者に強く求めている。

本書第一部はワルラス理論の背景となるアイデアを説明し、前著の解釈を補強する中心部分 (170 p.) である。それは著者が言う「成熟した包括モデル (mature comprehensive model: MCM)」を巡る方法論的な核心的部分と、bons を巡る議論 (第6章) に分かれ、さらに “*History of Political Economy*, vol. 19, no. 4” に発表された著作目録を大幅に改訂したものから構成される。55 頁の文献目録とそれに先立つ解説は、ワルラス研究に有用である。ほぼ同規模の第二部は、ワルラス解釈についての批判的な史的展望に当てられており、長い参照文献目録と索引が付いている。以下では、本書の中心をなす前半部分の評に絞りたい。

ケネーは、あろまほしき経済像を示し、スマスは来たるべき経済のあるべき姿を描き出した。そしてセーの追随者たちは、存在するものには理由がある、と主張した。それに対し、ワルラスはそのような言説を、根拠を示さ (せ) ない教条でしかないと批判し、同時かつ同様に実践的社会主義者の根拠無き素朴さを批判した。そして対案として、「科学的社会主義」の根拠となるべき、経済社会の現実に根拠を置く

経済学体系を打ち建てようとした。このワルラスの極めて現実主義的な点がこれまで看過されてきた嫌いがあるのは、著者の指摘通りである。

ワルラスのモデルが、ダイナミックで極めて現実的な描写であり、「経路依存的」な過程を考察していること、またそれ故にワルラスの数学体系は、MCM とは整合的ではないことを、原典からの多数の引用で、「ワルラスをして語りしめる」正統的な方法によって本書は論じている。問題はワルラスのモデルを、“arch-rationalist” (「超合理主義者」, 「原理主義的合理主義者」とでも訳したらよいか) と解するかどうかである。本書はそのような解釈に反論する。この点で、本書は一般均衡論が非現実的で仮想的な「理論」に過ぎない、という誤解の解消に役立ち、偏見を正す上で好ましい。

このワルラス研究の第一人者の主張は、『純粹経済学要論』のモデルが、後世想定されたような、非現実的・観念的モデルではなく、ワルラスの生きた時代の現実に依拠し、反映した、決して過度の理論主義の産物ではない、ことである。実際、ワルラスは『要論』においても常に自らの理論が現実に依拠していることを示そうとしている。

それにも拘わらず、また著者のこのような意図を歓迎しながらも、評者には、その議論に少なからぬ違和感が残る。ワルラス経済学の背景にある「思想」を論じたものとして本書を読もうとすると、読者は失望することになるだろう。著者は『社会経済学研究』を、余り重視していない。それ故、ワルラスの社会思想に主たる関心を持ち、若書きの論文をも重視したい評者には、例えば《ideal》等の多義的な言葉が十分に

吟味されていないと思える。

(1) ワルラスの理論モデルでは、不均衡下の取引は想定されていない (p. 175)。それは、各市場参加者の価値的な初期所有量の変化を生み、ワルラスの理論的前提に反する。bons を導入した tatonnement model が、ワルラス「本来」の realist model を損う、と著者は考え、それ故に否定的である。著者の理解では、現実的な不均衡下の取引が、経路依存的であり、数学モデルとは矛盾していることにワルラス自身が気づき、第 4 版に至って、bons の概念を導入し、その結果、現実的モデルを離れた (p. 177)、ということになる。しかし、何故第 4 版に至ってそれが導入されたかに関する説明は十分に理解できなかった。

(2) 著者の言う MCM では動的であるのに、方程式で示されたモデルは内在的発展の契機がないと批判される。しかし著者も指摘している様に、ワルラス自身、発展する社会を想定している。著者の批判が何処にあるのか、今少しくでも詳しく論じてもらいたかった。

(3) ワルラスは決定版に至るまで、生産関数の係数を可変的に定式化しながら、最終的には、固定係数モデルに戻している。著者は、現実の経済での経路依存性へのワルラスの認識が不十分であったためと考えている。しかしワルラスは充分認識した上で、固定係数の方が「より現実的」と考えた可能性がある。

(4) Bridel の主張に反し、1895 年の退職以来、理論的生産性は、急低下したと著者は主張する。著者のまとめた数字では、その主張の通り、理論的な業績は急減している。しかし同時に、その方法論の検討に重要な論文が最晩年に書かれているのも事実である。著者はこのような論説を余り評価していない。

(5) 『要論』の理論的モデルと、それが現実とどう対応しているか (p. 175) は別である。ワルラスは対応関係を示す努力はしているものの、それを証明しているわけではなく、またワルラスの方法論上、出来ることではない。ワルラス自身、現実とその本質的再構成である理念的モデルとが、必ずしも一致しない、と『要論』の中でも幾何学を例に出して注意喚起している。理論は、理念 (ideal) 的に再構成されたが故に「完全」なのであり、現実は無意味であるが故に「不完全」であって、理論的結論を現実によって検証することは無意味であるとさえ言っている。この点に著者は十分に目を向けていないと、評者には見える。

その思想的立場故に後継者に離反され、また、最大の理解者であったはずのジャッフェさえ晩年には疑問を呈した、頑ななまでに堅いワルラスの社会主義的な信条と思想とに惹き付けられる者としては、著者のワルラス理解は、余りに合理主義的で狭いものに見える。実際、本書の議論は、『要論』における“mature comprehensive model”に示される ideas とその数学的定式化の乖離への批判が中心である。ワルラスが決して机上の空論に留まったわけではなく、現実を見据えた議論を展開した傍証として「応用経済学」に言及しているのは、正にその通りである。しかし、それにしては、ワルラスの ideals (社会「理念」、書いた意図にも拘らずの「理想」、目指すべき彼方の頂点、と解さざるを得ない主張) が多い「社会経済学」への配慮が不足していると言わざるを得ない。このような興味から、本書での ideas という言葉を理解しようとすれば、期待外れになるだろう。

(中久保邦夫：姫路獨協大学)

安藤隆穂『フランス自由主義の成立——公共圏の思想史』

名古屋大学出版会, 2007, v+343+87 頁

近年随分と普及した「公共圏」という概念は、社会構成員個々が単なる受動的被統治者ではなくなった近代社会においては、構造化された国家と諸個人の私的領域とのどちらにも解消されない、その個人間のコミュニケーションを成立させるある社会領域があると考えられるものである。直接の物質化を求めれば、印刷・出版などのメディアの機能や「世論」・「公論」という形で人々が描く表象の内容などに見るしかない、確かに少々捉えがたいものだが、しかしその領域に住むのは、自ら判断し発信する個人であり、しかも法学・政治学・経済学等々の社会科学の分化には関わりない丸ごとの人間であって、近代社会の思想・制度の形成・展開はすべてこの領域を何らかの背景・基盤としていると考えることができる。

おそらくそれがこの公共圏という概念の強みであり可能性であろう。本書は18世紀後半からのそうした意味でのフランスにおける公共圏の政治化とそれへの対応（公共圏のポリティックス）という視点からフランス思想史を論じた浩瀚な研究書である。著者が該博な知識をもって展開する「フランス自由主義の思想と運動の構図」は非常に広大であり、当時の政治・経済・哲学・文学等の主要な諸潮流がほとんど一網打尽となるように配置されている。旧著『フランス啓蒙思想の展開』もしかりだが、かくも広範な対象を一人の著者が一貫した脈絡で叙述しているのは日本の研究史において例を見ないものではないか。それはこの公共圏という視点の可能性を示すとともに、本書に我国のフランス思想史研究における一種の記念碑的な意義を与えていると思う。しかし本誌での書評を依頼され

た評者としては困るのだが、著者によれば「経済的自由主義はフランス自由主義の中心ではなかった」ので、主題はあくまでも「政治的自由」に置かれ、経済学・経済思想自体は筆者の巡らすコンテキストの網の端にわずかに引っかかるにすぎない。文具店に行って大工道具がほしいと言っても批評にはならず、ただ個人的な愚痴になるだけだろう。だがあえて本誌の性格に甘えてこの「愚痴」を書いてみたい。なぜなら、後に言うが評者もまたとくに当時のフランス経済学を考えるにあたってこの公共圏という視点にある期待を持っているからである。

紙数がないのでテルミドール後の自由主義についてだけ言おう。本書ではそれは大きくはコンドルセーコンスタンのラインとシエースーレドレルのラインに分けられる。前者の核は「近代的個人の政治参加は、国家に向かって凝集するのではなく、国家から自立してなされること」、つまり公共圏に依拠して「国家に対峙する」近代的個人を主体とした根源的な「体制批判的自由主義」であり、そこに本書の「フランス自由主義」の本義がある。一方後者はフランスにおける「近代主体の未熟」のゆえにナポレオンの国家に妥協し「体制構築型」になったものであり、国家から自立した個人を欠いて「思想としての自由主義の生命力を失」い、今にいたるフランス社会の悪弊たる「国家による自由主義」（ジョーム）を生み落とす。

こうしてコンスタンの自由主義（それはつまりロック以来の「自由主義的な政治機構論の伝統に安心して身を委ねている」（田中治男）ものであり、本書の言葉では、市場システムの中に独り立つ「理性だけではなく深い感情的内面

性を持つ道徳的個人」が自分に命令をしない国家だけを求めているものだろう」と、悪しき「国家による自由」との二項図式が成立する。そして当時のフランス経済学は「シャプタルからセーまで相当の開きがあると見えても、この時期出現してくる自由主義は、レドレルの枠組みに収まるもの」としてほぼ丸ごと一括りになる。この箇所を読み、正直なところ困ってしまった。同じ籠の中に鰻と海蛇を見るかのような違和感がぬぐえない。

著者はすでに旧著で、コンドルセに「啓蒙的専制」を脱した「フランス市民社会論の成立」を見、その「直線上に」コンスタンを捉えるという構図を描いていた。それを貫くのは「商品生産社会としての社会的分業の構成員として諸個人がそれぞれの生活を確保するという形」での「自由で独立した人間の共存」という理念であり、つまりは啓蒙期から革命にかけてのフランス思想にまさにスミスそのものを探す旅だったと言えよう。主題は市民社会から公共圏に代わったが、本書もまたその旅の続きのようだ。

既述のように公共圏とは市民社会というどこか一種理念的な概念に比べより直接に社会的实在領域を示すものだが、その領域の住人はスミスの「自立した近代的個人」である、あるいはあるべきだとみなせば、かつての市民社会論と公共圏論は美しくオーヴァーラップする。諸思想に外から当てる定規だった市民社会という概念は、実在する公共圏という内なる定規に変わり、その住人たるべき「自立した近代的個人」を正しく捉えているかの正誤を判定する基準となる。そして定規に合わないものは「未熟」・「後進」の産物として一まとめになる。市民社会論の主張は『道徳感情論』抜きの『国富論』読みを批判するものだったが、その批判をフランスに当てはめていくと、経済学との接点がなくなり逆に『国富論』抜きの『道徳感情論』に純化していくのだろうか。著者は前著『フランス革命と公共性』で、レドレルに「公共経済学の成

立」を見ていたが、その「公共経済学」もまた「近代的個人」という「公共性の担い手」が未熟だから出てくるもので、本当の自由主義の名に値しない欠格者なのだ。

こういう言い方では刺々しくなってしまうが、はじめに言ったように愚痴を書いているのだ。これは、フランス経済学の非スミスの偏差（引いては「国家による自由主義」）を捉えるには、スミスの市場観を最初から貼り付けた「近代的個人の未成熟」という紐で括るのとは別のアプローチはありえないかという、本書の意義とは別の問題なのである。上に公共圏という視点にある期待を持つと書いた。本誌の読者には経済学にとって公共圏という概念にそもそも何の意味があるのかと思う方が多いだろう。しかし評者は以前革命期の「公共経済学」といわれる「重商主義」の関係を調べる中でその考えを改めた。我国の経済学史研究は「固有の重商主義」論以来スミスの重商主義概念の中に隠れた種差があることを明らかにしてきたが、従来のようにそれを市民革命や資本制を巡る発展段階論に押し込める前に、国際貿易や国内の農工関係などの経済的諸問題を捉えるに至った英仏公共圏の反応として見るならば違う視界が開けると感じたからである。「国家に対峙し自由に議論し」始めた公衆がいかなる経済システムを選ぶのか、その問題にはスミス以前に「重商主義」との照応の検討が要りはしないか。そもそも公共圏の個人は論理必然的にスミスの市場観に照応するのだろうか。評者はむしろその市場観が本書が「公共性論を持ち得なかった」と断じる重農主義の「非討議型」の秩序観を基礎に生まれることの方に問題を感じる。市場という「専制者」を唯一の自由の擁護者と見なさせるある特殊なコンテクスト、重農主義＝スミスによる重商主義の克服という図式の中にはそれが潜んでいないか。「公共圏」とはその理解のための一つの鍵になると考える。

(岩本吉弘：福島大学)

音無通宏 編著『功利主義と社会改革の諸思想』

中央大学経済研究所研究叢書 43, 中央大学出版部, 2007, xviii + 523 頁

500 頁を優に超える本書は、功利主義を支持する論考を集めた第 1 部 (1-8 章, 3-313 頁) と、反ないし非功利主義的な論考による第 2 部 (9-12 章, 315-517 頁) から成っている。20 頁の章 (3, 7, 9 章) から 95 頁の第 1 章まであり、内容も本誌の読者に対応する音無通宏「ベンサム功利主義の構造と初期経済思想」(第 2 章, 99-175 頁) から中川敏「ヴィクトリア朝中期における宗教意識と文学」(第 11 章, 417-86 頁) と多岐に渡っている。従って、統一的で総括的な書評をすることはかなり難しい。そこで、通説的ではない主張や新しい論点を各章から抽出し、主として経済思想にかかわる視点からそれらに論評を加えたい。

長大な第 1 章「功利主義の正義論」(池田貞夫) は、ロールズ『正義論』による功利主義批判に対して、ベンサムの自然権批判と正義「観」やミル正義論の検討の中から、功利原理である「効用の最大化」を「便宜性の領域」に、正邪の判断を「道徳性の領域」とに明瞭に区分すべきことを提案する (20, 67, 71-75 頁)。池田によれば、「ベンサムの理論はすでにこの区別を織り込んでいた」(21 頁) が論述の仕方が「粗雑」であったためにこの区別が曖昧化し、功利主義の道徳理論への「さまざまな解釈と論争を呼び起こした」(20 頁) という。この「ベンサムの道徳哲学の欠陥」(49 頁) を是正・整理したのがミル『功利主義論』であるとする。ミルはそのままでは乖離している上の「二つの領域を結びつける」(75 頁) ために、カントを利用することで、便宜的なものよりも「はるかに強く命令としての性格を持つ」「正義の感情」(67 頁) を正義の「観念」の源として取り出し、結論として「功利性

(効用) とは幸福を生む傾向を意味し、功利性の原理とは、最大幸福を生む行為を是認する感情である」とみなしたとする (86 頁)。この主張に対しては、是認の感情が「社会的な相互行為の…脈絡」から生ずるにしても (77 頁)、カントが直面した道徳的格率相互の衝突と同様の、異なった是認感情の間の対立から逃れる仕組みが提示されていない点と、そもそもベンサムがなぜ正義の問題をわざわざ便宜 / 効用の問題に還元したのかという、功利主義的方法的出発点への配慮を求めておこう。

2 番目に長い第 2 章で音無も、従来からの「最大幸福原理」を唯一の価値判断基準とする「一元的な功利主義理解」(103 頁) は、ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』での快苦原理の記述に依拠した倫理学、法思想、政治哲学に偏した研究の影響であると主張する。音無はそれに対して、ベンサムの民法関係草稿にある生存・豊富・平等・安全についての検討を通じて、ベンサムの功利主義が安全をめぐる「権利論と正義論を根底にもっており、…、平等な生存権と諸個人の多様な権利の尊重を基礎としていること」、したがって、ロールズらの批判者のいう「[最大幸福原理は] 少数者の生命の犠牲を正当化する」などということはないことを宣言する (122 頁)。そのうえで、等閑視されていた経済学の視点を付加することで矮小化した功利主義研究の壁を打ち破るとして、スターク版『ベンサム経済学著作集』の出版 (1952-54) に誘発された半世紀ほど前の石本美代子・山下博らによる研究以降埋もれていたベンサム『政治経済学便覧』(*Manual of Political Economy*) の草稿の詳細な再検討を行う (132-66 頁)。結論とし

て、権利論と正義論を前提としたベンサムを経済思想は「『相対的』豊富を実現し、『生存』を保証するアートとして展開されている」という(167頁)。そして、『便覧』までの初期の経済思想と政策思想は「『国富論』の自由主義的側面をさらに徹底させようとするもの」である一方で(同頁)、同時に安全と生存の重視から「市場メカニズムだけでは解決しえない問題をも視野にいられている」とみなす(168頁)。実は、この後者の視点が救貧法草稿執筆以降の1800年代に入っただけで、穀物の最高価格設定擁護に象徴される介入主義的政策へのベンサムの政策思想の「変化」をもたらしたとする。音無は、一見、状況に応じて場当たり的に、ベンサムが自由放任や国家干渉という背反する政策提案を行ったように見えても、そこには安全と生存を重視する「一貫した原理」(同頁)が貫かれていると主張する。この、いわば“立法のアート”としてベンサムを捉える立場からの音無による評価については、『便覧』後の『政治経済学概論』(1801-04)の方に、経済の自立的運動の領域(スポンテ・アクタ)の自覚とその阻害要因の除去といった、経済“科学”への明確な方法的意識が示されていることとの整合的な説明を求めたい。もっとも、これには、本書序文にある『新ベンサム経済学著作集』(i頁)の刊行を待たねばならないであろう。

本書の残り2/3にある各章は、第1部：第3章「功利主義と植民地—ベンサムの植民地論」(板井広明)、第4章「ジェームズ・ミルの統治思想—共感、道徳的制裁、世論」(益永淳)、第5章「J. S. ミルとL. ワルラスのレジーム構想」(高橋聡)、第6章「ヴェブレンと功利主義」(石田教子)、第7章「J. A. ホブソンの厚生経済学とその政策的展開」(八田幸二)、第II部：第8章「アリストテレス『ニコマコス倫理学』における応報」(濱岡剛)、第9章「アダム・スミスの資本主義観」(和田重司)、第10章「F. リストと1839~40年の経諸論文」(片桐稔晴)、第

11章(既述)、第12章「初期マーシャルの認識論と思想形成」(門脇覚)である。

これらのうち、まず第I部から留意すべきと思われる諸点を挙げておこう。第3章の、ベンサムは一貫して本国と植民地の利益という経済事情から植民地を論じているという「一貫説」の強調、第4章で統治の3要件としてジェームズ・ミルから抽出された「共感」・「道徳的制裁」・「世論」の、ジョン・ミルが『宗教三論』で示した社会と個人の道徳性醸成のための3要因、道徳的制裁の根拠たる「権威」・「教育の力」・「世論の力」への影響が(言及はないが)示唆される点、第5章での新古典派経済理論史では無視されがちな、ワルラスの社会主義的所有論の紹介、第6章のヴェブレンと功利主義の親近性を指摘する特異な見解、第7章ではホブソンの厚生経済学の性格を、機械生産の発展が人間の労働を受動的なものに変質させることをもとにして「質的功利主義」と特徴づける点などである。

第II部は、編者の音無が序文で解説するほどには、各著者達の功利主義への対質と関心は明らかではない。その中では、第12章で紹介されたマーシャルの心理学への関心と、そのことと「努力」や「活動」によって特徴づけられる彼の経済学的人間把握との関連についての紹介が示唆に富む。最後に若干の指摘をしておこう。第8章でアリストテレスの応報的正義の中に「友愛」の意義を強く示す点は、著者自身が指摘しているアリストテレス正義論の中に新古典派的要素を見いださう可能性とどう整合するか(349頁、注74)。第11章表題の「ヴィクトリア朝」という表記は、『広辞苑』の見出し語にもなっているほどの「グレシャムの法則」的誤訳の例で、単に「ヴィクトリア時代」とすべきである。

(付記：2008年2月に逝去された第1章執筆者、池田貞夫氏のご冥福をお祈りします。)

(有江大介：横浜国立大学大学院)

斧田好雄『マーシャル国際経済学』

晃洋書房, 2006, iv + 224 頁

国際経済学が扱う問題は大きく二つに分けられる。第一に、どういう財を輸出しどういう財を輸入すれば、その国にとって利益があるかという問題であり、第二に、貿易政策における自由と保護の問題である。

マーシャルとの関連で見れば、第一の問題は、リカードウの比較生産費説による貿易利益の分析に始まり、J. S. ミルの相互需要説による交易条件論を経て、マーシャルのオファー・カーブ分析による図形的精緻化へと至る国際貿易理論の歴史である。第二の問題は、貿易政策の歴史である。重商主義の保護貿易政策以後、19世紀中頃のイギリスでは、穀物法の撤廃(1846)、航海条例の廃止(1849)によって自由貿易の全盛期が到来するが、マーシャルの時代には、恐慌を契機とした不況期に再び保護主義的な風潮が高まっていき、20世紀初頭にチェンバレン・キャンペーンとなって爆発する。

本書は序論においてこのような国際経済学をめぐる諸問題を概観した後、マーシャルの国際経済学における貢献を明らかにしようとする。全体は3部構成となっており、第I部でマーシャル貿易理論、第II部でマーシャル貿易理論の現代的評価、第III部でマーシャルの貿易政策を扱う。

第I部では、第1章「研究遍歴」の中でマーシャルが国際貿易にどのような意味づけを与えてきたかを明確にし、第2章「国際相互需要理論」、第3章「輸入需要の価格弾力性」、第4章「安定条件の吟味」、そして第5章「貿易利益、関税理論」において、マーシャル貿易理論の内容とその貢献について吟味されている。経済学研究を始めた頃のマーシャルは、国際価値論と

国内価値論という二つの面から経済学をとらえようとして「初期草稿」をまとめ、それが後に『国際価値の純粹理論』(1879)と『国内価値の純粹理論』(1879)へとなっていた。その後、経済学の一般理論として『経済学原理』(1890)をまとめる方向が優先され、国際貿易論は、一般理論に対する特殊理論という位置づけから、より具体性をもつ応用として『貨幣・信用・貿易』(1923)として結実する。「初期草稿」から『貨幣・信用・貿易』まで、ミルの相互需要説を継承し、それを図形的に表現してオファー・カーブ分析として確立したのがマーシャルである。オファー・カーブ分析を用いたマーシャルの国際貿易論に対する貢献は、輸入需要の価格弾力性を定式化し弾力性に基づく交易条件決定論を展開したことだけではなく、初めて均衡の安定性の分析まで及んだことである。さらに、オファー・カーブに消費者余剰概念を適用し貿易の純利益の測定を行い、関税の交易条件に与える影響まで分析したことも彼の貢献である。

つづく第II部では、マーシャル貿易理論の現代的評価として、マーシャルのオファー・カーブ分析が後の国際経済学にどのように継承され発展させられたかを問題とする。ここでの分析は、第6章「オファー・カーブの導出」、第7章「弾力性アプローチ」、第8章「マーシャル＝ラーナー条件」、そして第9章「最適関税率」となっており、これは、第I部でのオファー・カーブ、需要の価格弾力性、安定条件、および貿易利益と関税に対応する形で展開されている。「オファー・カーブの導出」については、マーシャルが各交易条件に対応する輸出量と輸入量の組合せの軌跡としてオファー・カーブを導出

したのに対して、マーシャル以後の分析では、生産可能性曲線、予算制約式、社会的無差別曲線など、生産の均衡と消費の均衡の両面からのアプローチに発展がある。「弾力性アプローチ」では、マーシャルがオファー・カーブがシフトしたときに弾力性の大小が交易条件をいかに変化させるかのケース・スタディを行ったのに対し、今日では所得、金利、為替レートなどマクロ諸変数がどのようなプロセスで経常収支に影響を与え、その結果マクロ変数がどのように変化するかについて、弾力性アプローチが試みられている。「安定条件」については、マーシャルの安定条件と、為替レートの効果について吟味したラーナーの功績とを統合したマーシャル＝ラーナー条件をとりあげる。最後に「最適関税率」であるが、最適関税はあくまで自国にとってのものであり、自国が最適関税によって一時的に高い貿易利益を得ることができたとしても、それが相手国の報復関税を誘発し、その結果達成される貿易均衡は、世界全体の実質所得の低下と、自国自身の実質所得も低下させる危険性があることが図形的に示される。

第 I 部と第 II 部では貿易の理論面が対象とされたが、第 III 部では政策面が対象となる。第 10 章「歴史的背景」において、当時のイギリスの経済力が低下していく中で、自治植民地や直轄植民地あるいは後進諸国との有利な貿易によって経済の落ち込みをある程度緩和していた経済状況を概観し、そうした経済状況の中で起こった第 11 章「チェンバレン関税改革運動の経緯」、第 12 章「ヒュイNZ関税改革擁護論」といった当時の保護主義への動きに対して、マーシャルがどのような貿易政策を考案していたかを、「国際貿易の財政政策に関する覚え書き」(1908)を中心にあぶり出そうとし、その内容は、第 13 章「マーシャルの関税改革批判」、第 14 章「マーシャルの自由貿易論」、第 15 章「マーシャルの植民地観」、付論「マーシャルの

後継者任命をめぐって」で展開される。マーシャルは、オファー・カーブ分析をふまえて、輸入関税の負担を相手国に強要させることができるのは、それはかつてのイギリスのように、一国の輸出品のほとんどが独占的に供給されている特殊な場合のみであり、すでに多角的貿易体制が支配的である状況では、輸入関税の効果なく、むしろ関税は、間接的にマイナスの効果を生み出す点を指摘する。マーシャル体系では「経済的自由」が中心概念の一つであり、経済的進歩は「自由な産業と企業」によって競争を媒介として実現されていく。それは対外的にも同じである。そして、植民地との関係や、帝国統一よりも高い理想としてアングロ・サクソンダム連合が、自由貿易を通じての諸国間の物流的・文化的交流を促進するものとして提起されるのである。

以上、概要を述べてきたが、本書をマーシャル研究の中に位置づけたとき、その最大の特徴は、国際貿易理論から貿易政策に至るマーシャル国際経済学の全体像を描きあげたことにある。これまで各論としては多くの研究があり、特にマーシャルのオファー・カーブ分析についてみれば、ジョン・クリーディが、'Marshall and International Trade' Whitaker, J. K., ed. *Centenary Essays on Alfred Marshall* (1990)において、ミルへのヒューウェルの影響もふまえつつ、マーシャルのオファー・カーブを分析したものが有名である。本書における貿易理論の図形分析では説明が教科書的にならざるを得ないという欠点はあるものの、マーシャル国際経済学の全体像をまとめ上げた研究はおそらく初めてであろう。また、リカードウやミルからマーシャルへ流れ込む国際貿易論の系譜という視点からしても、マーシャル国際経済学の全体像が与えられたことは、研究の指標として大きな意義がある。

(藤本正富：大阪学院大学)

ゲゼル, シルビオ著, 相田慎一訳『自由地と自由貨幣による自然的経済秩序』(1920)

ぱる出版, 2007, ix + 724 頁

本書は, Gesell, Silvio, *Die Natürliche Wirtschaftsordnung durch Freiland und Freigeld*, 4 Auflage, Berlin, 1920 の翻訳である。1995 年 5 月, NHK「エンデの遺言」の放映以後, 我が国においても地域通貨の運動が急速に広まったが, 現在ブームは去り, 再構築の時期にあるといえる。その意味で, 時宜を得た翻訳の出版である。訳文は平明で読みやすく, 意識された文は原文が訳注に掲載されており, 参照に便利である。

近代的人格の成立と平等とは労働全取権と等価交換を基礎としていた。だがそれは, 資本制的な支配と服従の関係の中でしか成立しなかった。ここから, 私的所有と等価交換=利己的な人間を前提として, 資本制的生産を廃棄しようとする思想と行動, 自由主義的社会主義が生まれるのは一つの必然である。

ゲゼル (Silvio Gesell, 1862-1930) は, 「自由地」と商品と等価な「自由貨幣」によって, 「人間が自然によって与えられた装置でもって競争を平等に闘い抜くという秩序, それゆえに, 経済上の指導権がもっとも有能なものに与えられるとともに, すべての特権が廃棄され, 各人が利己心にしがいがいながら, 経済外的な配慮によって自らの活動力を衰退させることもなく, 自らの目標にまっしぐらに向かっていくと同時に, 経済的生活の外部では絶えず十分な他者への配慮と奉仕を果たすことのできる」(邦訳, 7)「自然的経済秩序」を目指す。

ゲゼルによると, 「社会主義運動において独占的支配権を握る」マルクス (Karl Marx, 1818-83) は, 資本を物財の所有とみなし, 私的資本主義に国家資本主義を対置しているにすぎない。これに対して, プルードン (Pierre

Proudhon, 1809-65) は剰余価値を物財の所産としてではなく, 経済的状况, 市況の所産とみている。そこからプルードンは, 既存の資本と並んで別の新しい資本を創造し, 稼働させることを提案する。物財としての資本が不足しているのは, 貨幣がそれを妨害しているからであり, 商品と労働を現金の地位に引き上げること, そのためにプルードンは交換銀行を提示したのである。だが, 彼は, 今日の貨幣が交換手段であるばかりではなく蓄蔵手段であることを見落としている。貨幣はさびたり, 腐敗しないために蓄蔵しておくことが可能であり, 交換の場で商品に対して優越的な地位に立つ。この優越的な地位が「剰余価値の原因」である。したがって改革は, 「商品が倉庫で被るのと同じ原価損失を貨幣にも被らせるべき」なのである。その時, 貨幣は商品と完全に等価となる。

また, 人間間の競争は, あらゆる土地特権が廃棄された場合にのみ, 公正な基礎の上で闘うことができる。すべての人間は, 地球上のすべての土地に移住し, 公的入札によって耕作する権利を持つ。その実現のため, 国家はすべての私有地を買収し, 借地料を担保証券の利率に基づいて資本化し, この資本化された金額をその金額通りの国債の利付き証券で, 土地所有者に支払う。その利子は, 国庫に流入してくる借地料によって支払う。貨幣改革が国際的に受容された場合には, 全世界の資本利率はゼロにまで下落する。その結果, 借地料がその利子を上回れば, それをすべての母親に子供の人数に応じて分配するという他者への配慮が実現する。

自由地について以上のように論述したのち,

ゲゼルは資本利子について論じる。彼は資本利子を「貸付金の利子ならびに物財（実物資本）の利子収益」であるという。そこには資本制社会に固有の利潤・利子概念はない。彼は、資本制社会以前、太古の昔から利子が存在することを根拠に、商業利潤も実物資本の利潤も、貨幣が商品の交換を妨害できる特権を持つことから生じる基礎利子と、生産手段を労働者に貸し付けることによって生じる貸付利子ととらえる。価値論を無用のものととらえ、市況（需給関係）に一切を還元する必然的結果である。

ゲゼルは、経済恐慌について次のようにいう。すなわち「価格騰貴が生じる場合、つまり需要が供給を超過する場合、信用が作動し始め、貨幣によって交換される商品の一部を奪うことで価格騰貴をますます加速させる。だが、価格下落が生じ始める場合、信用は後退し、商品は現金払いとなって価格下落をますます加速させる」（邦訳、321）。

こうした事態を回避するためには、あらゆる私的貨幣貯蓄を解消させるような貨幣改革、好景気の年にも不景気の年にも、価格の全般的変動なしに、市場が需要可能な流通貨幣を絶えずかつ正確に保持できるような貨幣改革が必要である。

ゲゼルは、自らの自由貨幣について次のように論じる。

貨幣は、分業によって必要になる交換手段以外の何物でもない。物々交換のはらむ困難性を克服することが、貨幣の役割である。商品交換の確実性、迅速性、低廉性をどの程度実現できるかが貨幣の品質である。貨幣も商品と同様に腐敗し、消滅する場合にだけ、交換を迅速、確実、低廉に媒介できる。

そのためには、需要を供給と同じように強制に従わせることが必要である。そうすれば、投機家の策力、レントナーや銀行家の気分が需要

に影響を与えることがないようになる。需要は、国家によって管理される通貨量と所与の商業制度が許す貨幣の流通速度とによって規定される。

自由貨幣は週ごとに額面価格の1000分の1の印紙を貼ることを義務づけられ、その分だけ減価する。貨幣を手に入れた者は、この減価を避けるため、出来るだけ早く、商品を購入するか貸し付けるようになる。こうした貨幣流通の強制の結果、貨幣所有者は利子や利潤に無関係に貨幣を流通させなければならなくなる。

資本家は、利子率が騰貴した場合にはより多くの所得を貯蓄し、新資本の形成を促し、利子率を下落させる。利子率が下落すれば、資本家は、率の下落を補うためにより多くの資本を投資し、資本量の増加を強いられ、そのことが供給を増加させ、利子率の下落を促進し、ついには利子の完全な消滅に至る。だが、実物資本の利子がゼロになっても、自由貨幣の保持にともなう直接的な減価損失を防ぐために、貯蓄は行われるし、貸付利子〔率〕が下落すれば、いっそう家屋、工場、船舶などの建設は行われる。

ゲゼルの「自由貨幣」論に基づいた運動には、1920、30年代の不況期における、ヴェーラ（WARA）・システム、ヴェルグルのスタンプ券、WIR（スイスの交換リング）、1983年以降のLETS等の具体的取組があり、現在世界で3000、日本で300あまりの地域通貨の運動がある。

ゲゼルの理論は、現実の整合的な説明という意味では多くの問題を抱えているが、社会改良の現実の運動を支える思想としての有効性を持っている。また、自由貨幣論は、あくまでも利己的な個人を前提とした改革論である。その限りにおいて、我が国で独自に設計されたエコマネーは、ボランティア活動の組織化として独自の可能性を持っている。

（秋田 清：別府大学）

小峯 敦『ベヴァリッジの経済思想——ケインズたちとの交流』

昭和堂, 2007, xvi + 461 頁

本書は、ケンブリッジ学派およびケインズ周辺の経済思想を研究してきた著者が、長年にわたり精力的に開拓してきた W. H. ベヴァリッジ研究のモノグラフである。内外において等閑視されてきた社会学者ベヴァリッジの全体像を描き出すべく、『ベヴァリッジ報告』という一点だけではなく、経済学史・経済思想史の視点から社会保障論とのウエイトを逆転させることで、ベヴァリッジの独自性をあぶり出そうとする。その意味でも「福祉国家の経済思想史」研究としての経済学史の新たな可能性を示唆した力作である。圧巻 450 頁を越える随所には、ウェッブ夫妻、ルウエリン=スミスらはもとより、ジェヴォンズ、フォックスウェル、A. マーシャル、J. A. ホブスン、ピグー、ケインズ、ロビンズ、ハロッド、ヘンダーソンらの経済思想史上の大人物との比較によって、これまで経済学史・思想史上の立場がほとんど知られていなかったベヴァリッジの思想的営為へアプローチするという方法が採用されている。登場人物が多彩で、いくつもの複線的思考が張りめぐらされており、時代とともに変遷する経済学者の知的交流や離合集散がヴィヴィッドに描き出されている。大いに多元的解釈の可能性を秘めた著書であるが、そこからあえて基本となる論点を抽出しよう。

本書は三部構成からなり、ベヴァリッジの生涯を、初期、中期、後期に分類している。第一部、初期の思想では、『失業論』（1909 年）を中心に取り扱っている。著者は、この時期の特徴を、失業論からの道徳論の排除と位置付ける。産業循環による失業でも、雇用不適格でもない「臨時雇用」（不完全就業）の発見は、救貧法的

な世界からの脱却の決定打となり、職業紹介所・失業保険などの社会保障制度の整備を促した。また、ピグーの『失業』（1913）にもベヴァリッジの影響が見られると同時に、ピグーにおける賃金率の伸縮性という仮定には、ベヴァリッジ・ケインズ「連合」が批判的視座を有していたとして、後に展開していく興味深い論点も提示されている。

第二部、中期の思想では、主に LSE 学長としてのベヴァリッジについて、1920-1930 年代を中心に論じられている。ベヴァリッジは、経済学を科学として再定義しようとしたが、その際、ハクスリーの生物学にみられる実証的な科学的態度とともに、ウェッブ夫妻のいう「社会の科学」という、社会科学の全領域を含み、実証と観察を重んじる「経済学」方法論において継承関係があると説き起されており、おおいに賛同できる。このことは、ロビンズの『本質と意義』（1932）をめぐる対立へと発展し、またケインズ『一般理論』（1936）への方法論的批判にもつながる。ベヴァリッジは、1930 年代においても 1909 年の失業分析を基本線で維持し、ケインズの「非自発的失業」概念などに、統計データを重視した批判的スタンスをとった。また、ベヴァリッジとハロッドとの方法論上の親和性も見逃せない。こうしたベヴァリッジの奮闘も、1930 年代における LSE 学長の辞任に象徴されるように、LSE には根付かなかったという意味でベヴァリッジの挫折が描かれる一方で、新しい要素の展開も指摘されている。それは「経済参謀」すなわち 1930 年にマクドナルド内閣のもとで発足した「経済諮問会議」あるいは「内閣経済部」の発想をめぐるケイン

ズとの親近さである。

第三部、後期の思想では、40年代以降のベヴァリッジの社会保障計画の実現過程が描き出されている。この時期は、ベヴァリッジにとって『ベヴァリッジ報告』（1942）、『自由社会における完全雇用』（1944）という戦後福祉国家の道標となる二著を発表した集大成にあたり、同時に『自発的活動』（1948）などの市民的自発性を重視する社会再建という、ベヴァリッジの理想の人間像が開花した。第二次世界大戦を背景にした「計画化」をキーワードに、「内閣経済部」を始めとしたベヴァリッジの「経済参謀」の実現が促されるクライマックスである。そうした中での基本的方向をめぐるホートレーとの交錯、連邦をめぐるロビンズとの連携などのエピソードをもとに、晩年のベヴァリッジの思想にも目配りがなされている。

評者としては、二つの論点を提起しておきたい。第一に、副題に「ケインズたちとの交流」とあるように、比較対象に選定された人物がケンブリッジ学派あるいはケインジアンに集中している。このことは「ケインズ・ベヴァリッジ型福祉国家」の再検討という著者の強い決意の表れであり、その意味で「後期」へのパラダイム・シフトから逆照射した、ありうべき問題設定である。ただし、ケインズ革命という大きな物語の陰に、「民主主義のもとでの計画化」という独自のテーマが隠されてしまった印象を受けた。著者も書くように、それは社会主義 vs. 資本主義という政治体制の問題ではない。だとすれば「計画化」の議論のされ方に、ベヴァリッジのどのような特殊性があるのか、例えば R. トーイ（2003）に描かれたような諸流派の中で、彼の「計画化」論の位置が究明されえよう。特に、「計画化」をめぐるケインズよりもむしろヘンダーソンらとの比較が意義深く感じられた。

第二に、他方で、初期からの方法論的連続性（リサーチ・プログラム）という視点で見た場

合には、マーシャルとベヴァリッジの対立が決定的に思えた。著者も、「マーシャルとウェッブの代理戦争」として、LSE を拠点とした、アンチ理論経済学としてのベヴァリッジの顔を重視している。ただし、内外でもカディッシュ、クート、西沢会員、佐々木会員らによってイギリス歴史学派の実像が明らかにされつつあり、また M. ラザフォードによってアメリカ制度学派と LSE のコネクションも新たに注目されるなど、ひとくちにアンチ理論経済学と言っても歴史学派・制度経済学としての多様な型、理論経済学との様々な「融合」のあり方が整理され始めている。つまり「福祉国家の経済思想史」を描き直すにあたって、アンチ理論経済学の内部の複数の流派との相互比較を行うことによって、ケインズを除いた「ベヴァリッジ型」福祉国家の独自性が、より鮮明に浮かび上がってくるのではなかろうか。具体的には、1909年の『失業論』をもってポランニーの『大転換』（1944）と比較したり、「臨時雇用」の着想においてホブソンの「異端」的発想からの影響を認めようと主張される際に、そうした視点の希薄さを感じる箇所があった一方で、ジェヴォンズやフォックスウェルによる景気循環・雇用変動論の影響関係の指摘などは大きな貢献であると思えた。

この二つの問題軸を交差させた点に、新たな課題設定が可能ではなかろうか。著者は先行研究としてハリス（1997）を「最新かつ最善」と評価しているが、本書の随所で提示された経済思想史的ベヴァリッジ像をもってすれば、ハリスの言うところの「官僚指向の市民的理想主義」、「古典的な共和主義」などの解釈はどう乗り越えられるべきであろうか。推察するに著者はこの点について、軽率な表現を慎重に回避している。しかし、その答えはすでに本書にあると感じるのは、評者だけはなかろう。「福祉国家の経済思想史」の新たな地平を予感させる書である。

（江里口拓：愛知県立大学）

佐藤滋正『リカードウ価格論の研究』

八千代出版, 2006, v + 286 頁

福田進治『リカードの経済理論』

日本経済評論社, 2006, vii + 280 頁

リカードウ研究は、日本では 1970 年代以降、初期リカードウについて、あるいは価値論、分配論について研究が進み、経済学史研究の中でも多くの成果が生み出される分野となった。またこれと並行して欧米では、スラッファ (Piero Sraffa) やホランダー (Samuel Hollander) 等の研究が広範な影響をおよぼし、リカードウ研究は質量ともに高まった。今回、佐藤滋正『リカードウ価格論の研究』と福田進治『リカードの経済理論』の二つの著作が登場し、リカードウ研究に新しい知見が加えられたが、両書がそれぞれこれらの研究の中にどう位置づけられるか、まずこのことから確認をしておこう。

かつてリカードウ研究が多くの成果を生み出したとき、そこにはそれぞれの論者による現代経済学の原型あるいは先駆者としての評価があった。日本では、リカードウはマルクス経済学の先駆者あるいは最大の批判者として、またスラッファはリカードウの中に剰余理論の原型あるいは穀物比率論をみていた。ホランダーの場合も、リカードウを新古典派経済学へつながらる理論とみなした。現代経済学の争点や課題が、リカードウ研究にそれぞれ投影されていた。福田は、このようなリカードウ研究とは一線を画し、スラッファやホランダーの現代経済学の視点からのリカードウ解釈を否定し、むしろピーチ (Terry Peach) のようにリカードウに内在した歴史的事実を重視する立場をとる。

しかしこのように内在的研究を重視する一方で福田は、スラッファやホランダーの理論的研

究の成果を検証したうえで、その理論的貢献を利用する姿勢を保持する。かれは、「剰余の原理」と「蓄積の原理」という視点を、それぞれスラッファとホランダーから借用し、リカードウの理論を、「剰余の原理」と「蓄積の原理」を基本原理とする体系とみなす。また近年、リカードウ解釈としては軽視される感のある労働価値説については、福田はそれをリカードウ経済学の理論的基礎であることを強調し、リカードウの理論を、労働価値説を基礎とする「分配と成長の分析」であるという。さらにもう一点、福田のこの著作の特徴を挙げるならば、それは数学的定式化の導入であろう。かれは一般にリカードウの数学的定式化が、現代理論に引き寄せられてきたことを批判した上で、リカードウに内在した定式化を試みる。

このような福田の研究は、ほぼこれまでの 1970 年代以降のリカードウ研究の延長線上に位置づけられ、そこから一歩踏み出そうとしたリカードウ内在型の研究といえる。全体として、網羅的かつ切れの良いリカードウ研究である。ただスラッファやホランダーのような現代理論からの解釈を否定し、ピーチに依拠することの多い内在型研究といっても、その解釈には比較的スラッファよりの姿勢が強く現れている。とくに「剰余の原理」という視点は、スラッファ理論の影響が大きい。その点では、スラッファ的解釈の強い内在型研究と言ってもよい。このように福田の研究は、スラッファ、ホランダー、ピーチなど欧米の研究を参照基準とし、さらに

日本の 1970 年代以降の研究に対しても目配りをするものとなっている。ただ後者に対する比重は、大きなものではない。

さて、このような福田の研究に対して佐藤の研究は、リカード研究としては対極的である。福田がリカードの価値論、分配論、成長論という理論的部分を対象とするのに対して、佐藤は『原理』後半の課税論諸章と論争的諸章を対象とし、それらを「課税論」、「資本蓄積論」、「外国貿易論」に関する部分として区分し、それぞれ『原理』第 8-18 章、第 19-21 章、第 22・23・25 章を考察対象とする。そこでは J-B. セーとの関連も重要な分析対象となる。この佐藤の研究は、これまでの価値論、分配論、成長論さらに機械論を対象とするリカード研究がやり残してきた分野に対して、全体として歛を入れていくものとなっている。対象の多様性に依拠して論点は多岐にわたり、評者にとっては理解が及ばないところも多いが、多年にわたる努力が生み出した労作といえよう。

佐藤は『原理』後半部分の考察を通して、スミスとリカードにおける価格論の差異という視点を重視する。佐藤によれば、リカードにおいて法則は社会状態と一体となって現れてくる。さまざまな社会状態に応じて、賃金・利潤・地代の分配を規制する諸法則は異なる。たとえば新たな輸入規制、租税賦課、奨励金の交付次第で投資構造は変化し産業構造は変わり、それぞれのケースに即して分配を規制する諸法則も変化する。そしてこの投資構造を規定する資本移動は、「価格」という指標をとおして行われる。だがここでリカードの自然価格とは、単に市場価格の中心としての自然価格というだけではなく、社会状態によっても変動させられるものである。たとえば穀物税や輸入規制によって、自然価格と市場価格はまったく異なる乖離・収斂のプロセスをたどる。佐藤はこのようなりカード価格論の特徴を強調し、スミスのような中心価格としての自然価格への市場価格の取

斂という単純な構造とは異なる価格論がリカードにあるとみなす。佐藤がリカード『原理』後半部分の課税論、論争的諸章を対象としながら、『リカード価格論』と著作の表題を掲げる理由もここにある。

福田、佐藤それぞれの著作の大きな特徴は以上のようなものだが、さらに立ち入っていくつかの論点を検討しておきたい。ただ紙幅の都合上、取り上げる論点は必ずしも網羅的とはならない。福田の著作は、第 1 章の初期リカード論、第 2 章と第 3 章の労働価値論、第 4 章の賃金と動学分析をはさんで、第 5 章と第 6 章の分配と成長の分析とに大きく分けられる。

初期リカード理論について福田は、スラッファの穀物比率論でもまたホルンダーの賃金・利潤相反論でもなく、ピーチによる解釈に依拠する。この時期リカードは、スミスの資本の競争による利潤率決定論と、賃金財価格の変化が貨幣賃金の変化と全商品の価格変化を生むという論理とを踏襲し、利潤率の決定について論じており、ここから次第に独自の理論形成に進んだことが指摘される。

福田は労働価値論について、これをリカード経済学の理論的基礎として重視する。そのとき労働価値論の発展過程で、リカードは一貫して労働価値論を保持し続け「後退」はしなかったこと、労働価値論の修正の問題で、貨幣部門と資本構成が同一の部門で賃金と利潤率の変化を計算し、その利潤率を他部門の価格変化の計算に利用する二段階の計算方法が採用されていたことの指摘は注目してよいだろう。リカード労働価値論の論理構成では、絶対価値の概念がリカードにあるが、かれの労働価値論は生産費用の論理にもとづく労働価値論であるという指摘は新規なものである。そのとき、「絶対＝費用価値」という概念が登場するが、この概念が成立するかどうかは微妙だ。ただ、リカードが生産費説の次元で価格と分配変数の関係を考察し、そのとき尺度基準として労働価値を

採用したと考える評者とは基本的に考え方は同一のように思われる。

リカードウの賃金概念は、「実質賃金一定」の仮定と「実質賃金変化」の仮定とのどちらが本質的かという点でこれまで意見が分かれてきたが、福田によれば、リカードウはこれらの仮定を場面に応じて使い分けていたという。前者はリカードウの比較静学分析あるいは「剰余の原理」で使用され、後者は動学分析あるいは「蓄積の原理」で使用されていた。こうして、リカードウの理論体系は、労働価値論にもとづく分配と成長の理論と捉えることができるようになる。ただこういうとき、リカードウにおいて比較静学分析と動学分析はどのような比重となっているかは問われてもよいのではないか。評者には、前者が主で後者が従のようにも思える。とくに後者は、賃金論あるいは利潤論の一部にとどまるのではないかと思われる。

佐藤のリカードウ課税論解釈は、著作の表題に含まれる「価格論」の視点がよく現れた部分である。リカードウの租税転嫁論によれば、生産物への課税は生産の困難による自然価格の上昇をもたらす、それが当該部門からの資本流出を引き起こすことで供給が減少し、つぎに需給の乖離から市場価格の上昇が生まれる。このプロセスを経て市場価格は自然価格へと収束していく。こうして租税は消費者に転嫁されていく。また利潤税の場合には、商品価格への転嫁によって全商品価格が上昇し、利潤税の転嫁は名目的なものとなってしまう。賃金税の場合にも、賃金・利潤の相反論によってやはり利潤の負担となる。佐藤はこのように課税論を捉えている。

また佐藤が「価格-貨幣領域」とよぶ箇所では、租税による商品価格の上昇は、対外的な輸出減・貨幣流出を生み、ここから貨幣価値は上昇し商品価値は元の水準に下落していく。この「商品価格は、商品価格によって変動させられる貨幣価値によっても変動する」という循環論的な関連を、佐藤は「価格-貨幣領域」とよぶ。

次に佐藤のリカードウ資本移動論解釈を見る。ナポレオン戦争の終了によって、農業に投じられていた資本の製造業部面への転換が急務となったが、そのとき資本移動にともなうさまざまな理論問題が生じる。リカードウは、農業から製造業への資本移動によって増加した製造業品で、減少した国内産農産物以上の農産物を輸入できるので国富は増大すると考える（外的必然性）。またこれは、平時になっての穀物価格の下落による耕作放棄（内的必然性）によっても二重に促進される。ただこのとき、資本移動は必ずしも即座に進むわけではない。穀物価格低下による利潤のマイナスと廃棄される土地資本価値の秤量により、資本移動が停滞する中間的な投資構造の段階が生まれる。そしてこの中間段階では、戦時と同じ投資構造でありながら、穀物価格がより低いため地代は低下し、賃金も低下し、利潤は上昇し、労働維持ファンドの増加と富の将来的増加を生み出すことになる。

他にも佐藤は富と価値の区別、リカードウによるセー評価、資本蓄積論、さらに外国貿易にかかわる論点を論じている。

（水田 健：東日本国際大学）

平井俊顕『ケインズとケンブリッジの世界』

ミネルヴァ書房, 2007, xi + 401 頁

本書は、戦間期（第一次世界大戦から第二次世界大戦まで）に、その当時、経済学を中心地であったケンブリッジにおいて、ケインズを中心とした経済学者たち（ピグー、ロバートソン、ホートレー、ケインズ）が、どのような社会哲学（市場社会観）を持っていたか、を中心に論じたものである。全体は5部18章からなっている。

まず、第I部の1・2章で当時の時代状況を概説した後、第II部の3・4・5・6章で本書の主題が分析される。ケンブリッジのドンであったピグーは、資本主義と社会主義を詳細に比較検討した結果、社会主義に軍配を挙げる。また、ホートレーも個人主義システムの弱点を指摘し、真の目的である厚生を達成するために、コレクティヴィズムの道を指向する。ロバートソンとケインズは、ここでの分析を見る限りでは中道左派である。

続く第III部の7・8・9章は、「ブルームズベリー・グループ」が論じられる。われらがケインズとヴァネッサ、クライブ、ロジャー、ダンカン、ヴァージニア、レナード、リットンといったこのグループの中心人物との関係が、経済学書としては異例の紙面を使って分析されている。

第IV部にある10章から16章は、ケインズの諸活動の分析である。これらは、「ケインズの生涯」、「『確率論』と「若き日の信条」」、「ケインズ経済学の形成過程」、「ケインズの講義」、「『一般理論』を読む」、「雇用政策と福祉国家システム」、「『一般理論』理解と戦後のマクロ経済学の展開」であり、既発表の論文が中心となっている。この部分は、筆者がケインズ研究の第

一人者であることを証明している箇所である。前著『ケインズの理論—複合的視座からの研究』（東京大学出版会、2003年）とあわせて読むと、理解が深まること請け合いです。ちなみに、この『ケインズの理論』は、ケインズ研究の大家である伊東光晴氏によって、「本年度のベスト3」（毎日新聞2003年12月）に選ばれた著作であった。

最後に、第V部に移る。ここでは、多元化している経済学の状況を歴史的に概観している17章と、筆者の市場経済観を披瀝している18章からなる。筆者は、「中央に収斂するかにみえた経済学は、この30年間に、左右への明瞭な分裂を、つまり二極化をみせてきている」と指摘する。また、17章の末尾には、「経済学の人的資源の多くは、難解な数学化への傾向を一層強め、現実問題との関係をますます疎遠なものとする傾向が認められる」という文章を配置し、経済学の現状を深く憂慮されている。評者も筆者のこの見解にまったく同感である。

さて、本書は『ケインズとケンブリッジの世界』と題し、ケインズを中心に彼を取り巻く経済学者たちがどのような社会哲学を持っていたかを論じたものである。その目的は首尾よく達成されているし、本書の意義もまさにここに存在する。ケインズを中心とした経済学者たちは、市場経済のメリットは認めたものの、そのデメリットを鋭く指摘し、経済不安定性の除去、雇用の確保、所得の再分配などの施策を是認し、福祉社会を指向する社会哲学（市場社会観）を唱導した、ということである。現在、ヨーロッパで進められている「ニュー・リベラリズム」の原型の一端を担ったのが彼らだった、という

ことであろうか。

以下には、評者が本書を読んで感じた点を挙げてみる。第7章にあるグループの特性を論じた「新しい価値の創造者」という項目の中に、「彼らは無神論者であり、ムーアの…」というフレーズがある。周知のように、ケインズは「若き日の信条」の中で、「ムーア自身はピューリタンで形式主義者、…ウルフはユダヤ教で律法学者、私自身は非国教徒、シェパードは国教徒で聖職者…」と述べている。そこからすると、彼らがすべて無神論者であるというのは、少し無理があるのではないか。

また、ウルフの妻であるヴァージニアは、自分達は決して、腐敗したり、邪悪であったり、あるいは単に知的であったりする人生観ではなく、「禁欲的で厳格な人生観」を持っていたという。レナード・ウルフなどは、ケインズも言うとおり、まさに厳格なユダヤ教徒（宗教者）であった。筆者は、彼らがムーアの宗教を受け入れて、彼の道徳を拒絶したという箇所を深読みしたため、ここでは一般化し過ぎたのかもしれない。

次に、経済学と市場経済との関連である。筆者が市場経済社会を否定していないことは、第18章「市場経済システムをめぐって」を読めばよく分かる。否定さるべきは市場原理主義であって、市場経済ではない。「市場メカニズムが意識的・無意識的に活用されることで、プロメテウスの力が解き放たれ、そのことにより、近代社会の国富の増大と国民生活水準の向上に多大の貢献がなされてきた。だが、市場メカニズムは破壊的な力を有するがゆえに、国家による賢明な管理が同時に要請されるシステムなのである。そしてそれは各国経済のおかれた状況によって、市場化、自由化をどの程度の速度で行なうべきかは千差万別である」、というのが筆者の結論である。多元化社会を肯定したこの

結論に、異議を差し挟む人は誰もいない。評者自身も、経済学史やケインズの研究を通じて、筆者と同じ考えを持つ。しかし、これだけでは、何かが足りないと感じるのである。

本書全体を通して、あるいは特に最終部分「市場社会考」などからも、筆者はケインズやケンプリッジの思想家と同様、中道左派の思想に好感を持たれているようである。実は評者も以前はそう考えていた。ところが、評者は近年、市場原理主義のような極右は論外であるが、中道の中でも少し右派の思想に親近感を覚える。人間の本性は自律性（人格性）にあるので、福澤諭吉が唱えたような独立自尊や自助の精神、またEU諸国が取り入れている福祉に肩入れし過ぎない「補完性の原理」が重要である。

コンピュータ技術の発達、グローバリズムの進展、社会主義の崩壊、中国などの資本主義化などを見てみると、時代は大きく変化していると言わざるをえない。時代の変化を敏感に感じとり、これからの時代にふさわしい経済学が必要である。ケインズやケンプリッジの思想家たちの社会哲学も、その時代の雰囲気（大恐慌などによる資本主義システムの危機、社会主義社会の進展、福祉国家思想の興隆など）を敏感に感じ取り、それに適するような経済学を構築してきた。直感なき分析は空虚である。

これからは、グローバリズムの進展、コンピュータ技術の発展などを視野に入れ、市場経済と様々な慣習や文化、規範などの関連を分析しつつ、自律性と社会性を調和させるような経済学を構築すべきである、と評者は考える。筆者のますますの研鑽に期待したい。最後に、本書の読者には、平井俊顕著『ケインズ100の名言』（東洋経済新報社、2007年）と平井俊顕編著『市場社会とは何か』（上智大学出版会、2007）もあわせて読まれることを勧めたい。

（中矢俊博：南山大学）